

犠牲者にクラスメートの名は見えず石巻中卒後七十五年
伊藤長門

幾つになつても、懐かしいクラスメートである。万一を思つて、何度も犠牲者名簿を読み返している作者の姿が目にかぶ。昭和十年前後の石巻中学の卒業生である作者。九十歳を越えておられるはず。

小さな物編む灯の下に眼鏡かけまこと静かな冬のはじめは
木島泉

「小さな物」は手袋だろうか。昭和時代、いやいや大正時代の雪国のような、レトロで懐かしい空気が読める一首。

餌を食う命と餌になる命ラッコの食事時間はたのし
藤島秀憲

生きた貝や小魚を食うラッコ。「食事」と呼ぶのかどうかは分からないが、何か食うときのラッコは楽しそうだし、それを見ているのも楽しい。上旬のやや理屈っぽいような言い回しが、ラッコと重なるとユーモラスにひびくのが楽しい。

噴煙がけふも上がりて風に乗り突に厄介な火山灰
降りではじむ
八汐阿津子

この歌、鹿児島弁をフリガナにした工夫が見どころ。楽しいアイディアである。鹿児島では、風の吹く方向によって、桜島の噴煙による降灰の被害はまことやつかいなものらしい。挨拶のように「まことやっけなへがふいでけた」と言っているだろうか。

甘酒の湯気に目鼻をけぶらせてふき溜るがに家族の
三人
佐々木寛子

家の中ではなく、外出先の店のテーブルをイメージした。三人に作者が入っている家族のようにも読めるが、ここではそうではなく、店で見かけた家族と読んでおきたい。がら空きの店の一角で、湯気の立つ甘酒を飲む三人。「ふき溜るがに」が、店の様子も想像させて、なかなか。

紅葉を見ることはなく東雲に妹はひとり逝きてしま
えり
稲垣国男

挽歌の型をふまえた妹への挽歌。慟哭するのではなく、さらっとたんとと表現して、かえって、深い哀悼の思いが読者につたわる。鍛えあげられてきた伝統詩の型の力である。

ペトナムに片足置いてきたと言いつつ人おり隣のベ
ンチに
クリシュナ智子

第四句で切った句切れが成功。一気に第四句まで読ませ、もうかなりの高齢だろうその男のイメージを浮かびあがらせる。公園の風景らしいが、映画の一シーンのようである。

晩秋の光ことごとく集いたり谷中み墓辺の銀杏を仰
ぐ
宇都宮とよ

上旬、黄葉した銀杏の木の表現の工夫がうまい。光を反射するのではなく吸収している感じが読者に伝わる。佐佐木由幾の墓に参って下さった折の作らしい。